

明治座今昔

長谷川時雨

青空文庫

芦寿賀ろすがさんは、向う両国の青柳といった有名な料亭の女将おかみでもあつた。百本杭くひの角かどで、駒止橋こまどめばしの前にあつて、後には二洲楼にしゅうろうとよばれ、さびれてしまつたが、その当時は格式も高く、柳橋の亀かめ清せいよりきこえていたのだ。横浜にいった最初の旦那だんなは、判事はんじさんだというものもあつたが、その人はどうしたことか切腹してしまつたのだ。

だからおしよさんが、お嬢さんあいての月謝をすこしばかり集めて、二絃琴にげんきんなんぞ教えているということは、めんどくさかつたろうと思う。慰さみ半分の閑ひまを消すためだつたかもしれない。おしよさんの家の箏笥たんすの上の飾りものの数は言いつくせない。

およそ美術的にかぎった玩具おもちゃの数々——ああした趣味もこれからの世間には見られまい。下品なものはない。隣家となりに常磐津ときわづの老おばあさん婆ばあさん師匠が越して来て、負けずに窓のある部屋へ見えるように飾りたてたりしたが、覗のぞいて見ると、それは子供にも不思議に思えた男の子のつけているもののかたちを、かぎりならべておがんでいた。

おしよさんの家うちへは、綺麗きれいな娘さんたちが多く来た。みんな美しい人だった。お母さんや、ばあさんの自慢の娘さんたちだった。鴛鴦おしどりに鹿かの子こをかけたたり、ゆいわた島田たかしにまだいたり、高たかし島田たかしだったり、赤い襟えりに、着ものには黒くろ繻子じゆうすをかけ、どんな

よい着物でも、町家ちようかだから前まえかけをかけているのが多かった。前垂れの友禅ゆうぜんちりめんが、着物より派手な柄だから揃っていると綺麗だった。春の夕暮など、鬼ごっこや、目かくしをすると、せまい新道に花がこぼれたように冴さえ々ざえした色彩いろが流れた。玉村の——お菓子屋の——お島ちゃんは面長な美女で、好んで黄八丈の着物に黒じゆすと鹿の子の帯をしめ、鹿の子や金紗きんしゃを、結ゆい綿た島田の上にかけているので、白木屋お駒という仇名あだなだった。

山口屋——本問屋——のお駒ちゃんは八百屋お七——お駒ちゃんの妹の幸ちゃんこちうは実にはぱっちりした、若衆だちの顔つきだった。

天野さんの——化粧品問屋——×さんはおとなしく、金物問屋のおぬひちゃん、袋物問屋のおよしさんその他の人たちも醜いのは

なかつた。

高い脚立きやたつをかついで駈かけてきた点燈屋てんとうやさんも、立止つてについて眺めている。近所の人たちはいうまでもない、通行の人たちも立止つている。そんな時、おしよさんはどんなことを思つていたろうか、いつか、こんなことをはなしたことがあつた。

「あたしは十五の時お母さんに叱なられたことから、ふと死にたくなつて、矢の倉河岸がし(大川端)に死ににゆこうとしたら、町内の角に木戸口があつた時分のことだね、急いでゆく前にぱたんと立ちふさがつたものがあるので、怖こわ々ごわ顔をあげてみたら、男の首くくりがぶらさがつててね、あつと思つたとたん死神がどこかへ飛んでしまつて——」

「その時、おしよさん、どんな姿なりしてた？」

何でも訊ききたがる私は、話にぶらさがるようにきいた。

「ゆいわたに結つて、黄八丈の——あたしや、まあいやだよ、いい気になつて……この子はいけない子だ。」

ふと、その頃の自分とおんなじような、年頃の娘たちをあずかつている事を思出したのだろう笑つてしまった。

だが、その娘さんたちに交つて、娘のような、娘でないような人がひとりいた。お金ちゃんにきくと、アンポントンが知る前にかみがた阪地へいった人なのだそうだ、曙山しよざんさんていうのだといった。

曙山という名は、アンポントンにも新しいものではない、まさか子供でも、錦絵の智識から羽左衛門はねざえもんかとか尾上梅幸おがみうめゆきとかよ

ぶようなこともしなかつたから、曙山とは、さわむらたのすけ沢村田之助のはいみ俳名ようだと知っていた。幕末頃のくさ草紙には、俳優田之助が人気があつたからか、小意気こいきな水茶屋の女なぞに環菊かんぎくのお田たの之とかなんとか書いてあつたほどだから、俳名の曙山も目からくる文字の上でのおなじみだつた。

その女ひとは黒い顔で、大きな鼻で、体はグニヤグニヤとしていた。長じゆばんが褌つまから蹴け出されると、緋ひぢりめんだつたり、薄紫ぢりめんだつたりした。黒ぢりめんに加賀紋の羽織を着て、風呂敷ほどの絹半巾きぬはんけんを鼻からまいて、車からおりると、

「おツしよさん——」

て鼻声を出して、踊るように袖をバタバタさせて、

「おお寒む寒む、はよう温かいものでもおくれ。」

と妙に甘ったれたアクセント調子で太い声を出した。

みんなが羽根や手鞆てまりをついていると、

「わたいも、つこ。」

と仲間になる。

「さあ、あんたはん、あげますウ。」

と器用に、なんでも巧じょうず者だ。

アンポンタンは思った。この女ひとは、どっか大きな家とこの娘で、病

気——ばかのようなので、髪を断きらして遊ばせてあるのだらう、

だから、あんなに無作法ぶさほうなのだ——そう思えたほど、堅気かたぎの娘

たちとは調和しない奔放ほんぼうさがあつた。

その人は斬髪ざんぎりだった。だが、その女の人が、なんで田之助の俳名つながりと関係があるのかがわからなかつた。あたしの解釈では、くさ草紙の人物、環菊のお田たの之さんのように、これは生きた人間が田之助ぶつているのだらうと思つた。しかし、環菊のお田之はそれは美しい女に描いてあるが、曙山という女は汚らしかつた。だから言つた。

「あの女ひと、気狂い？」

すると、お金坊は金切り声を張りあげて、

「おツさん、曙山さんのことを気狂いかつて！」

「悪い子がいるね、誰がわたしのこと気狂いというた。」
太い声がモツタリといつて、こつちを振りかへつた。

「あの女の人、黒い汚ない顔だつて。」

「フン、黒うても白うなる、白粉おしろいつけて美しうなつて見せてあげる。——金坊、おツさんに白粉おしろいだしてもろうとくれ。」

あたしは怖気こわげだつた。気狂いが、白粉をつけだしたりしてどうなるのかと——

丸い手鏡を片手に持つて、白粉刷毛おしろいばけでくるくる顔をなでまわしていた曙山さんは、傍らにいるおもよどんや、お金ちゃんを顎あごでつかつて、紅べにをとれの、墨をかせのと、命令するようおしに押つぶした声で簡単にいいつける。

「その手拭てぬぐいをおよこし。」

鏡台わきの手拭かけにあつた白地に市川という字が手拭一ぱい

の熨斗のしの模様になつて、えんしやう 薙えん 升しやうと書いてある市川左団次の配り
手拭をとらせるると、上手に姐あねさんかぶりにして、すつと立上ると、
「おツさんの寛袍どてらをもつといで。」
と自分の帯をときだした。

あたしはとんでもない事をいつてしまつたとしよげていたが、
廻りの者はゲラゲラと笑つて面白がつている。

曙山さんという人は、わざとらしく怒りつぽく、

「お腹なかがすいとるのに、みな面白そうに笑つてからに、わたしばかりこんなことさせて——おごらんかつたら怒る。」

「どういたしまして、これこの通り、ちゃんとお仕たくはしてござります。」

おもよどんはそんな事をいつて、大きなお膳の上のにせたおすしの大皿と、もひとつの高脚膳おぜんにのせたものをはこんできた。その上には酒徳さかどつくり久利ものつている――

「では、まず一ツ――」

曙山さんは立ちながら腰をかがめて、お猪口ちよこでなく、そばの湯ゆ呑のみをとつてお酒をついで、ごくごくと飲みほした。

あたしはまた溜息キセルをついた。おしよさんはなんでだまって煙草タバコなんか長い煙管キセルからのんきにふかしてるのだろう――

と思いがけずおしよさんがこんなことをいった。

「お前さんがそうやってると白糸しらいとがよさそうだね。」

「あたしもそう思う、鈴木主人もんどをつきおうてくれるものがあれば

「川崎屋（市川権十郎）ならいいけれど——」

曙山さんは、ふと、アンポンタンを見た。

「あの子がわたしのこと気狂というたのやろ、ほんに無理もないこと。これ御覧、綺麗きれな長じゅばんだっしやろ。」

姐さんかぶりの曙山さんは、褌つまをあげて見せたが、

「よい事がある。」

とって着物を脱いでしまった。下には薄紫に遠山紅葉とおやまもみじの裾模すそ様のあるちりめんの長じゅばんを着て、白はかたの細帯をまいていた。

「この上へお着せ。」

おもよどんが、もみうら紅絹裏の糸織いとおりのどてらを長く上にかけてた。

曙山さんはふところ懐紙がみで顔をあおぎながら立膝たてひざをして、お膳の

前の大ざぶとんの上に座り直した。

「さあ、みんなおすしおあがり。」

おそろしく横柄だった。あたしはかつて他人から、そんな風に声をかけられたことがなかったから、いよいよ気狂いだと思った。けれどみんなは、嬉しそうに、楽しそうに、ゲラゲラ笑っていた。

この人の正体がやっとわかった。女形だったのだ、旧時代の遺物そのままに育てられて、久しく阪地へいつていた俳優だったのだ。東京の水になれないので、むかしのままのお坊ちゃんやんで、とお師匠さんはある時いつていた。お金ちゃんの説明によると、

「曙山さんは女の通りに育てられたのよ。けど、ほんとに女かもしれないわ。裁縫おしごともよくするし髪も巧じょうず者に結うし、なんでもかでも女の通りよ。だけど男だつていうの、女の通りに育てられた男だつていうの。こんど来たら、なんだか男と半分半分になつちやつたけど、もうせんには、ほんとに女だつたわ。だから、おツしよさんも、女のお弟子さんとおんなじだつて——」

そしていつた。この間も、新富座しんとみざへ乗込みのときは、以前の通りに——鬢かっらだつたけれど——楽屋下地に結つて、紫のきれを額にかけて、鼈べっこう甲かんざしの簪をさして、お振袖で、乗組んだのだと。

あたしは気味がわるいと思つた。どうしたつて、あの大きな黒い顔は、そんな、花やいだ、たおやかさを思わせはしなかつたか

ら——

ともかくこの人は、結局女ではなかつたのだ。でも、その後、時々面白い笑話がきかされた。

盲目めくらの坊主頭のお婆さんが死んで、その法事ほうじのかえりに、浅草田圃たんぼの大金たいきん（鳥料理）へいったらその人たちが、どうした事か、家業柄にもにず、この女形を完全に女にしてしまつて、御ご後室様しつさま御後室様と、お風呂まで女風呂へ案内したとか——

またそののち、曙山さんの名を養家へかえしてしまつて、市川の門下になつた。時勢はいつまでも彼を娘と見るような甘いものでもなく、彼もまた臺とうのたつた女おんな男おとこになつてしまつたが、娘ぶりより、御後室の方がまだしも気味わるくない。新富町の露路

裏に、男役者と、やもめ二人が同居していたが、そんな時、彼はすっかり世話女房だった。片つぽが帰らない朝なんぞはブツブツいつて女中と一緒に働いていた。

ある朝、片つぽの男に捨られた女が、勢い猛に押寄せて来た。

彼女は、昨夜、ゆうべ自分の情夫おとこが他の女ものと一緒にいたことを耳にして、

大変なけんまくで駈けこんで来たのだ。彼女は下駄もはいたままで座敷へ飛込みかねない物もの凄すごい有様だった。あたしを差おいて

——と彼女はいった。彼女は彼の家の火鉢の前に座るべき正妻の権利を第一にもちうるものは自分だと信じてるのだ。だから障子をガラリとあけた。

「どなた——」

ぼやけた声がある。

はて！ 女もさすがに躑躅ちゅうちよした。

「あたしです。」

「あたしって、どなた？」

彼女は、自分の位置であるべきもののような問方といかたをするのが小癩こしやくにさわった。けれど、来たわけをいわないわけにはいかな
い。

「××さんはいませんか？」

「ええ、まだ帰らないんですよ、あきれつちやうじやありませんか、何処どこをウロウロしているのだから。」

女はギクリとして障子の中を覗のぞいた、そこには、姐あねさんかぶり

の後むきが、小意気な半纏はんでんを着た朝の姿で、たすきをかけて、
 長火鉢ながしばちの艶拭つやぶきをしていた。

「まあ！ あなた、おかみさん——」

女は、しどろな言葉で挨拶あいさつして、来た時の勢いとは、くらべ
 ものにならないしよげかたで、どぶ板に、吾妻あずまげた下駄の音を残して
 帰っていった。

なんだろうまあ、あの女は折角来たのに、用向きもいわないで
 ——と思っていると、

「おおこわ、こわ！」

といつて、同居の片つぽが帰つて来た。そして、姐さんかむりの
 仲間を見ると、フツと吹出して、

「おかみさんがいるのに、なぜ、いわなかったってたぜ。」
といつて、カラカラ笑つた――

いまこの人は老女役ふけやくになつて、生れ土地の関西へ歸つてゐる。

久松町の千歳座ちとせざが焼けて、明治座が建つと、あの辺は一体に華はな

やかになり、景氣だつた。芝居小屋がやけて芝居小屋がたつのに、

そんなかわりがあるかといいたいほど代つた。明治座前に竈河へつがい

岸がしへかけて橋がかかった。川を離れてその橋じりへまで、芝居

茶屋が飛んで建つたほどだ。明治座は橋にむかつた角で、芝居茶

屋は右手に並んでやまと、はりまやと五、六軒、通りをへだてた

横に日野屋さぬきや六、七軒、楽屋口うらに中村屋が一軒、みん

な大間口の素晴すばらしい店だった。茶屋は揃そろつて、二階に役者紋ぢらしの幕を張り、提ちようちん灯をさげ、店前みせさきには、鼻ひいき屑くずから役者へ贈物の台をならべた。劇場の表飾りもまけずに趣好いおりをこらし、庵看板いあんをならべ、アーク燈を橋のたもとに点つけたので、日本橋区内には、今までになかった色彩いろどりをそえたのだった。それが人気にあつた。しかも中洲なかせは開けたばかりですぐ近く、前の川の下である。橋をわたれば葎よしちよう町の花柳場さかりばがあり、いんしんな人形町通りがあり、金のうなる問屋町にとりまかれて、うしろには柳橋がひかえている。ずっと昔、浅草猿若町へ、三座がひけぬ前の、葎屋ふきやち町よう、堺さかい町ちようの賑にぎいをとりかえしたかの觀かんを呈ました。もともと千歳座があつたが、中芝居ちゆうしばいであり、人気のあつた中島座は小芝

居ですでに焼けて亡び、中洲に真砂座まさござがあつても、歌舞伎の稽古けいこ芝居か、新派であつたので、明治座はたいした人気となつた。

それに、そのころ尾上一家の細かい芸よりも、豪宕ごうとうな左団次（今の左団次のお父さん）が時流に合つて人気を得ていた時で、その左団次が座頭ざがしらであり、団十郎が出勤し、福助（今の歌右衛門）が女形おやまだといふので、左団次ひいき鼻貞の力ちから瘤こぶは大変だつた。

二絃琴のおしよさん芦須賀さんは、その左団次が、若い時からおかほの岡惚れだといつてさわぎ出した。

だから、曙山さんは左団次の弟子になつた。おしよさんは、当地なしみに馴染のない人だからと、毎日毎日楽屋へいろんなものをもたしてやる。ほかのものはいいがお汁粉しるこをどつきりこしらえてもつ

てゆく時は、おもよどんは運ぶのに大変だ。とにかく、お稽古はそつちのけで、明治座のはなしに無中になっている。

アンポンタンは十二、三の時から、あの貧乏な勝梅さん（前出、

長唄の師匠）のかきがらちよう蠣殻町とよざわだんの家から出ると豊沢団とよざわだんなんかいう

へつついがし竈河岸の義太夫の師匠の表格子にたつて、ポカンと中の稽古を

きいて過し、びっくりして歩きだして橋を渡ると、千歳座の前で

看板にひっかかり、それからつけぎだな附木店まで歩いて、本箱の虫にな

つて、家から迎えがくるか、おもよどんかお金ちゃんに送りなが

らわびてもらつて、暗くなつてから家へかえる習慣になつていた

から、明治座が出来たから急に芝居の前にたつわけではなかつた

が、みんなとは違つた意味で、自分の欲をたんのうさせてもらつ

た。

もともと家では、長唄が一日、二絃琴が一日と隔日にとい
うのを、おめく盲目の勝梅さんの方はトツトとすませて二絃琴に通うのだ
た。しまいには、勝梅さんは三日おき四日おきにしかいかなくな
った。月謝が早く手にはいらないと、勝梅さん一家は当惑してし
まう（妹と二人分だから）。そういつては悪いと思つても、貧に
はかてずお婆さんかお君ちゃんがとりにくる——あたしの母はい
くらその困ることをあたしに言いきかせてても、月謝を届けるの
がおくれるので、それから毎日けいしをあけて唄けいこほん本の間を
調べる。毎日そのままだ。もう二絃琴はさげてしまふと怒つた。
ほんとにさげられてしまった。

けれど、あたしは平気で、無代ただで稽古しに出かけてゆく。それがあたしの権利のように——おしよさんはなんとも言わなかつたが母の方が困つた。あたしは稽古そつちのけで芝居の研究をする

研究というときこえがいいが、覗のぞいてきたままを台所でやるの

だ。譬たとえば、丸橋忠弥の堀ばたとか、立廻りの見得とか、せまい台

所でほんものの雨傘をひろげるのだから、じきに破いてしまうが、
一ひとかた方かたならぬ高島屋びいきは、小言どころではない。よくおぼ

えてきたよくおぼえてきたとほめる。ここの立廻りは、いくつ踏
んで、トントントンとこうきまると、棒をふりまわして棚のものを破こわしても叱しからない。わからないところがあると、おもよどんに

くつついて行って楽屋から見学だ。いつまでたつてもコツのみこめない下廻りを見ると、おとなって、なんて物覚えが悪いんだろうなんて生意気にも思う。

左団次の、新富町の家の稲荷祭りなんていうと、おしよさんは夢中だ。それでもきまりが悪いので、むこうにゆくと子供衆たちが大悦びで——なんていつている。

現在の左団次はアンポンタンとおなじくらいだから初舞台から知ってるわけだ。新富座の『和田合戦』の佐々木小次郎だったか、まんまるく大福餅のようなのを覚えている。その後明治座時代の、少年期の彼はへたくそ——だが、一体に少年期に大成するものは、早くのびが縮まるようだ（私は彦三郎や、寿三郎を、後に

異なる味をだす役者だといって、みんなに、まだですか、だいぶゆっくりだが、まだ見どころありですかなんて笑われるが、私はまだだと言っている。左団次の今日あるを少年期の時誰がいいあてたろう、自分でも少々悲観していたのをしている。舞台へ出るときまりわるがって、うつむいて、モヅモヅとものを言う。

まつすぐに述べてしまうとまつすぐにひっこんでゆく——見物は気の毒そうな顔をする。お父さんが働きてで、人気ものだけに、若いせがれ伴の人気のないのが、一層はかなげに思われたのだった。

「銀行家にしようと思うのだが——」

と、あの舞台では睨にらみのきく眼が、慈眼というように柔和になつて、楽屋では、これも大町人か、それこそ、そのころの、あまり

こすくない銀行頭取の面影おもかげをもったお父さん左団次がゆるやかに話す――

ぼたんが小米こよねになった。おしよさんのうちへあそびに来た。いつも楽屋や舞台で、知りきった顔なのに、この少年は背広を着てきて、キチンと座っている。一言も口をきかない。廻りのものやおしよさん夫婦は種々いろいろ骨を折ってしやべるが、かんじんの少年客はムツとしている。そのくせ帰ろうともいわない。

そこでアンポンタン、大成した彼の舞台を見、舞台の悪党ぶりを見、息をひいて、白い眼をむいて、顎あごでしやくつた太々ふてぶてしさを見ると、ウフツという笑いが、表面へ出ずお腹の底の方で笑う。それほど少年の客小米の、キクイクジョたる風采ふうさいが、教育勅語

を読む山間の模範少年か、社主の前へ出たであろうところの、×
×会××社の少年諸君にもさもにたる勤直ぶりであつたから――

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

明治座今昔

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>